

Ⅲ 教育課程改革への意見（中間試案）

この意見は、グループ全員が各自の研究と実践をもとに、自由に討議した発言を整理したものである。意見の対立を尊重し、幾つかの意見を並記しておくことが、問題点の所在を示すことにもなると思われるるので、強いて結論を出そうとしなかった。来年度は更にこれをもとに研究をすすめるつもりである。

1. 高校普通科の性格をどうとらえるか

「大学は学問を教える所であり、高校はその基礎を学習させる所である。学問とは、科学的な方法を基礎にしているもので、高校段階ではこれを主にすべきである。」という意見と、「進学率が大都市においては90%をこえ、しかもその大部分は普通科に集中している現在、高校普通科はその性格を大きく変えているのだし、その現実に対応した改革が必要ではないか」という意見とがあった。これをどうからみあわせるか——それが以下のすべての問題にもつながるポイントである。

2. 教科内容の検討、教育課程の再編成

① 「地理」と「地学」

地理の自然的分野を地学にうつす意見と、地学の地理的分野を地理にうつす意見とがあった。いずれにしても、無駄な重複をなくして、すっきりさせたいという点では一致している。それに関連して、地理学習をもっと系統化すべしという意見が出された。

② 科学史、技術史の強化、導入

「歴史科」の中で、政治史、文化史、経済社会史などの基底の1つである科学・技術が無視されている傾向があること、他方「理科」では、科学史、技術史を扱う余裕がないことから、「歴史」の中にそれをふくめたら、という意見が出された。史観をめぐっての異論が出されたが、仮説とその実証の積み重ねという科学の方法が重要であるということでも了承された。歴史科の中で科学史、技術史教材の不足は、一つには〈文学部歴史科〉という日本の学界の現状からもきているのだろうが、かつて西洋史、東洋史という分離の伝統が、「世界史」という高校教科の新設で変えられていったように、制度的に始まって学問の内実が後にできるということをも期待できるのではないかと

という意見がだされた。

③ 「思考」訓練の系統的教育の必要

⑦ 中小学校の学力テストの結果にも示されるように、国社数理などにおいて共通して、論理的でねばり強い思考力が欠けている現状で、しかもそのための強力な教育が考えられていないようである。

⑧ かつてのエリートたちだけの教育の場合、無意識のうちに思考力を身につけていったが、高校の大衆化にともなって入ってきた「(能力的)中間層」以下には、特別の場をつくり、系統的教材によって整理し訓練していくことが大事である。

⑨ 現在、あまりに「錦の御旗」的なイデオロギー的思想が人をとらえているので、事実在即して論理的に思考することの訓練がとりわけ要望される。

⑩ 思考力の不足は、受験のための形式的訓練や詰めこみの暗記、テレビの視聴覚教材などの映像の氾濫、「先生たちがあまりに親切になりすぎて」の具象化、学習内容の高度化、量的増大、「初めと終りだけ読んですませる」ダイジェスト化の流行、などから、〈考えない、考える余裕がない、考える必要がない、考えようとしなない〉などの状況が生れているのであろう。しかし、むしろ、それだけに、それらを放置してはならない。「頭が悪い」「考えない」「受験勉強が悪い」などときめつけて責任を他に帰するのでなく、ふつうの、あるいは質の悪い生徒に、論理的思考の形成がどこまで可能であるかをさぐり、データを積み重ね、系統的訓練のテキストブックをつくりだしていく作業が今されるべきではなからうか。※(※これらについては、なお本紀要P. 160~162参照)

④ 「技術学」の新設

現在 ⑦ 科学技術の高度の発達と ⑧ 先にのべたような高校普通科の質的転換に加えて、卒業生の多くが就職し、しかも、勤労者(ブルーカラー)になるという状況に対応するため「技術学」科の新設が必要ではなからうか。この要望は更に次の論拠からも支持される。⑪ 理科教育再編の方向が基礎的原理的なものに向かい、エレクトロニクス的・工学的側面を扱う場が他に必要となる。⑫ 知的なものと肉体的労働の統一をはかる総合科学技術教育の見地からも望ましい。

—これに対しては、幾つかの異論が出された。たとえば、⑬ 一般普通教育の中で技術学をやった方がよいという実証的根拠があるのか。⑭ 役立つ役立たな

A. 高校普通科の教育課程改革の問題

いという基準だけでよいのか。④ 第一次産業から第二次産業をへて第三次産業へと産業構造の重心が移り、高校出身のボーイやウエイトレスまで出てきている現在、そこで必要とされる技術学とはどのようなものであるか——など。

⑤ 「芸術」や「文学」の再検討

以上の教材の増加や教科の新設を実現しようとなると、少なくとも2～3時間と相当の予算の裏づけを必要とし、そのため、芸術教科や国語科の文学教材を減少させてはどうかという意見が出された。(例えば、ソビエトでは高校段階において国語：物理の時間数が、日本の約3：1に対して2：1(文科系)1：1(化学系)2：3(物理系)である。)「現代において高校を、文学・音楽を知らずに出ていくのと、エレクトロニクス・技術学を知らずに出ていくのと、どちらが困るか」という問題にもなる。それは、「生きる」「人間をつくる」とはどのようなことなのか、という問題にまでつながる。これに対しては、長時間、多面的な論議がなされたが、意見は基本的な対立をふくんで、来年にもちこされることになった。

⑥ 全教育体系の中での位置づけ

⑥の問題は、高校段階だけでは解決できないのではなかろうか。⑤で芸術や文学教材をへらすことを主張した者も、芸術的・文学的な感動や情操を無視したのではない。知的・論理的思考は直観と切り離せないものであり、情操を養うこと、芸術的直観の訓練の中で思考や論理も鍛えられる一面もある、という数学担当

教師の意見もあった。問題は「後期中等教育」の中で他のより重要なものを(相対的に)へらしてまで、やる必要があるか、ということである。小中段階で国語、芸術に集中的に時間をかけて、高校ではうんと比重をへらすか、無くして、科学的教科をふやすべきではないか、という意見である。それに対しては、日本という社会の特殊性を考えるべきであるという反論もあった。

この問題は、高校の中での必修統一と選択多様化ともつながる。すべてを総花式にやらせるか、コース別、性別、個人別などの選択・分化をもう一度考える必要があるのではないか。教育課程にしても、内容(教科書をふくめて)にしても、一つにすべてをまとめようという意見でなく、少くとも三つ位にまとめてみることも大事なのではなかろうか。BSCSが三種の教科書を編集したように——という意見もでた。

以上の他、

⑥ 全教育体系—学校制度全体の総年数と内容

⑦ 入試・浪人・労働

の問題がだされた。

3. むすび

これらの問題について、附属という教育実験の場で試みうるものはとりあげ、大学の教育学部の他、文・理学部、法経、工農学部の学者の協力を得て、その問題追求の巾を広げ、内容を深めていく努力を重ねていきたい、と我々は考えている。(中尾)

IV 総括

(1) 教育内容の実験的研究というテーマを掲げながら、実は各教科毎のそれぞれ日常的な試みしか問題にできなかったことについて、或は羊頭をかかげて狗肉を売るの感をもつ人があるかもしれない。それは我々自身の感じでもある。

しかし、たびたびのAグループの会合の中でたたかわされた議論の焦点となったのは、高校の教育課程は高校の段階だけで改革が可能なのだろうかということであった。改革できないことについて理論だけを提起するのは学者的発想であって、そうした空想をどれだけならべたとしても、日本の教育の前進を期待することはできないであろう。

たしかに高校の教育課程の改革案をまとめることがこのグループをつくらせた共通の関心であった。そして改革の方向について、第一部のその3で示されてい

るようにいろいろの要求が各方面から出されてきている。産業界の高校教育に対する関心はかなり強いものがあるし、科学技術の進歩に対して高校教育が立ちおくれしている点については多くの人が指摘している。

問題は高校進学率が都市部で80%に達しようとしている現在(洋裁・理美容、その他の職業教育や企業内教育、さらに青年学級などの社会教育を含めれば16～18才のほとんどに近い青年たちが何らかの形でうけている)後期中等教育段階の教育の制度と内容をどのように統一し、改革したらよいかということである。

20世紀初頭(明治33～35年にかけて)の義務教育(4年)の就学率は80%台から90%台に達したのであったが、現在の後期中等教育はほぼ20世紀初頭の小学校段階の就学率(進学率)をみせているともみることができる。念のためにいえば、現在の大学進学率は、20